

日韓王陵級古墳における墳丘の特質と評価

青木 敬

1. 序
2. 新羅および周辺地域の豎穴系埋葬施設と墳丘
3. 新羅および周辺地域の横穴系埋葬施設と墳丘
4. 墳丘の高大化とその評価
5. 日韓墳丘の比較検討
6. 跋

要 旨 本稿では、新羅およびその周辺地域における古墳の墳丘を分析し、日本列島の古墳との比較検討をおこなう。分析手法としては、対象とする例の墳丘形状が、楕円形あるいは正円系のいずれを指向するのか指数を用いて数値を算出する。さらに、墳丘長に対する墳丘高の割合を示すため、こちらも指数を用いる。導出した指標をもとに出現年代や地域性などを把握する。

分析の結果、対象地域では墳丘が楕円から正円へと変化することを把握し、それが豎穴系埋葬施設から横穴系埋葬施設へ転換する時期と軌を一にすることをあきらかにした。その理由として、豎穴系埋葬施設を有する古墳では、埋葬施設形状に沿って腰高に被覆することが、墳丘の第一義的役割だったためと考えた。その後、横穴式石室の採用が墳丘周囲の整備を誘引し、墳丘外表に基壇外装状の表飾をおこない、そこへ十二支像をはじめとしたレリーフを設置する、その設置には方位や正確な割り付けが不可欠なため、結果として整美な円丘を構築する。こうした点が墳丘正円化の契機と解した。

また新羅では、北魏における高大化した皇帝陵の築造再開を契機に、すくなくとも5世紀後半から新羅式高塚として高大化した墳丘を築造し、横穴系へと埋葬施設が変化しても継続する。そして墳丘の高大化は、中国北朝に端を発するもので、北朝の影響が漸次新羅から日本列島へと波及していくたと考えた。5世紀後半以降、墳丘は高大化といういわば中国的な墳墓形態を採用し、東アジアの動向をふまえると、権力の所在を顕在化させるという各地の王権に共通した指向性があると推測した。

キーワード 墳丘 正円化 高大化 新羅 加耶 日本列島

1. 序

以前筆者は、日韓において墳丘築造技術の相関性が想定できる事例が少数だが認められること、また韓国における前方後円墳に類似した技術が採用される例も存在するいっぽう、在地の技術で築造された例も多く、土木技術の採用は、被葬者の出自などとも相まって多様と説いた¹。また、墳丘拡張といった側面からも検討を加え、上方への拡張という概念が日本の古墳では稀少だが、韓国では全羅南道羅州市新村里9号墳や伏岩里3号墳など崇山江流域の複合墓に複数存在することから、古墳ないしは墳丘に対する概念が日韓では異質な部分が多いと理解した²。

さらに筆者は、墳丘と石室の相関性について検討を試み、堅穴系埋葬施設を用いる前・中期古墳においては中央部埋葬を原則とするが、墳頂部多葬が増加するにつれ、墳丘の中心を避けて儀礼の場としての空間を確保するような埋葬施設のレイアウトへ変遷すると指摘した³。続く後・終末期古墳では、横穴系埋葬施設の採用が一般的となるが、中央部埋葬を重視するこれまでの傾向を墨守する例もいっぽうで存在する。また、墳丘規模を優先したために埋葬施設が墳丘中央から逸した場所に構築した例も、6世紀代はひろく各地に認められるが、7世紀代になると徐々に中央部埋葬重視へと収斂していくとした⁴。

ただ、この墳丘と埋葬施設の相関性という視点だが、こと朝鮮半島の古墳では中央部埋葬が貫徹しているためあまり有効でない。横穴系埋葬施設を一例にとっても、墳丘中心部が玄室のどこに位置するかといった小異は、事例分析によって地域差あるいは時期差といった傾向を見いだせる可能性はあるものの、中央部埋葬という大原則は動かない。そうした前提で李盛周の研究をうけた吉井秀夫は、墳丘と埋葬施設の構築順序に注目し、1～6世紀にかけての朝鮮半島の墳墓を墳丘先行型と墳丘後行型とに二分し、その地域性および時間的変化の過程をあきらかにした⁵。さらに吉井は、横穴系埋葬施設の本格的採用以降、こうした分類が大きな意味をもたなくなるとし、その理由として「構築順序がどうであれ、古墳が完成してから被葬者が埋葬される」⁶ためと説明する。そのため、吉井が示した視座を横穴式石室にも援用して分類することは、どうやら生産的ではなさそうだ。

しかし、筆者がこの数年来韓国の古墳における墳丘を観察するうちに、墳丘形態などが変化する傾向を抽出できると判断した。それは、墳丘規模が大型であるほど墳丘平面形がゆがむ例が多く、小型の墳丘ほど整美な例が多いと気づいたことに端を発する。はじめはこの点に着目して検討を開始したが、検討を進めるうちに、理由はどうもそれだけでないこともわかつってきた。本稿では、その理由について説明し、朝鮮半島における古墳の墳丘の特質の一端をあきらかにすることを目的とする。

ただし検討対象が膨大なため、ここではおもに新羅を対象とし、王陵級の古墳における

墳丘の特徴およびその変遷について整理して、加耶をはじめとした新羅周辺の状況についてもふれる。そのうえで新羅の様相と日本列島の様相とを比較することで、双方に共通する影響やその史的意義についても言及したい。

2. 新羅および周辺地域の堅穴系埋葬施設と墳丘

(1) 慶州地域における堅穴系埋葬施設を有する古墳の概観

慶州地域では、3世紀中頃に大型木槧墓が出現し、さらに4世紀中頃～5世紀初頭にかけて積石木槧墓が出現し、慶州を中心として拡散していく。墓制の代表的特徴として、埋葬施設を墳丘築造に先行して設置し、埋葬後に墳丘を構築することが知られる⁷。加耶諸国においても大型木槧墓が出現し、その後高靈・玉田・咸安・固城において堅穴式石室（石槨）と大型墳丘を有する古墳が築造される。墳丘外周などには護石が用いられ、本来的には封土流出防止などの機能があったと推定される。ここでは大型墳丘を有する5・6世紀の代表的事例を取りあげる。

さて慶州地域では、三国時代新羅の時期におびただしい数の積石木槧墓が築造された。日帝期より朝鮮古蹟研究会などによる発掘調査がおこなわれ、光復以降は皇南大塚や天馬塚などの王陵の全面調査をはじめ、多数の古墳が発掘調査されてきた。現在も、市内中心部のチョクセム遺跡で国立慶州文化財研究所による長期間の大規模調査が実施されており、埋葬施設の構造、墳丘規模、副葬品の内容などから明確な階層関係がうかがえる点や、C10号木槧墓から完形で出土した馬甲、札甲など、三国時代新羅の墓制や遺物研究に大きく寄与する成果があがっている。以下では、墳丘と埋葬施設の全貌があきらかになった発掘調査例のうち、墳丘の全容が把握できる既報告の事例を取りあげる。

楕円指数と長高指数 なお本稿では、検討に際して墳丘の高さを長さで割り、100を乗ずることにしている。これを長高指数と仮称する。さらに、円墳の場合墳丘形状が正円形に近いかあるいは楕円形とすべきか、その判断根拠として楕円指数を導出する。楕円指数とは短軸を長軸で割り、100を乗ずることで算出した値をいう。

皇南大塚（皇南洞98号墳） 慶州市内中心部に位置する邑南古墳群のうち、皇南洞古墳群に所在する皇南大塚⁸は、新羅最大の王陵として名高い。墳形はいわゆる瓢形墳（双円墳）を呈し、男性を埋葬した南墳、女性を埋葬した北墳の2基が連接する。墳丘の全長は南北で114mだが、およそ直径80m前後の円墳2基が接しており、墳丘高は北墳が22.6m、南墳が21.9mをはかる（第1図上）。互いの墳丘が連接しているため楕円指数は正確に示しえないが、それぞれの直径を80mとした場合の長高指数は、北墳で28.2、南墳で27.3程度となる。墳丘規模は無論のこと、比較を絶する大量の金銀製品をはじめとした副葬品からみて新羅王・王妃の墳墓とみてまず間違いない。副葬品などから南墳より北墳が少し後に築造され

たと考えられているが、おおむね5世紀後半代だろう。

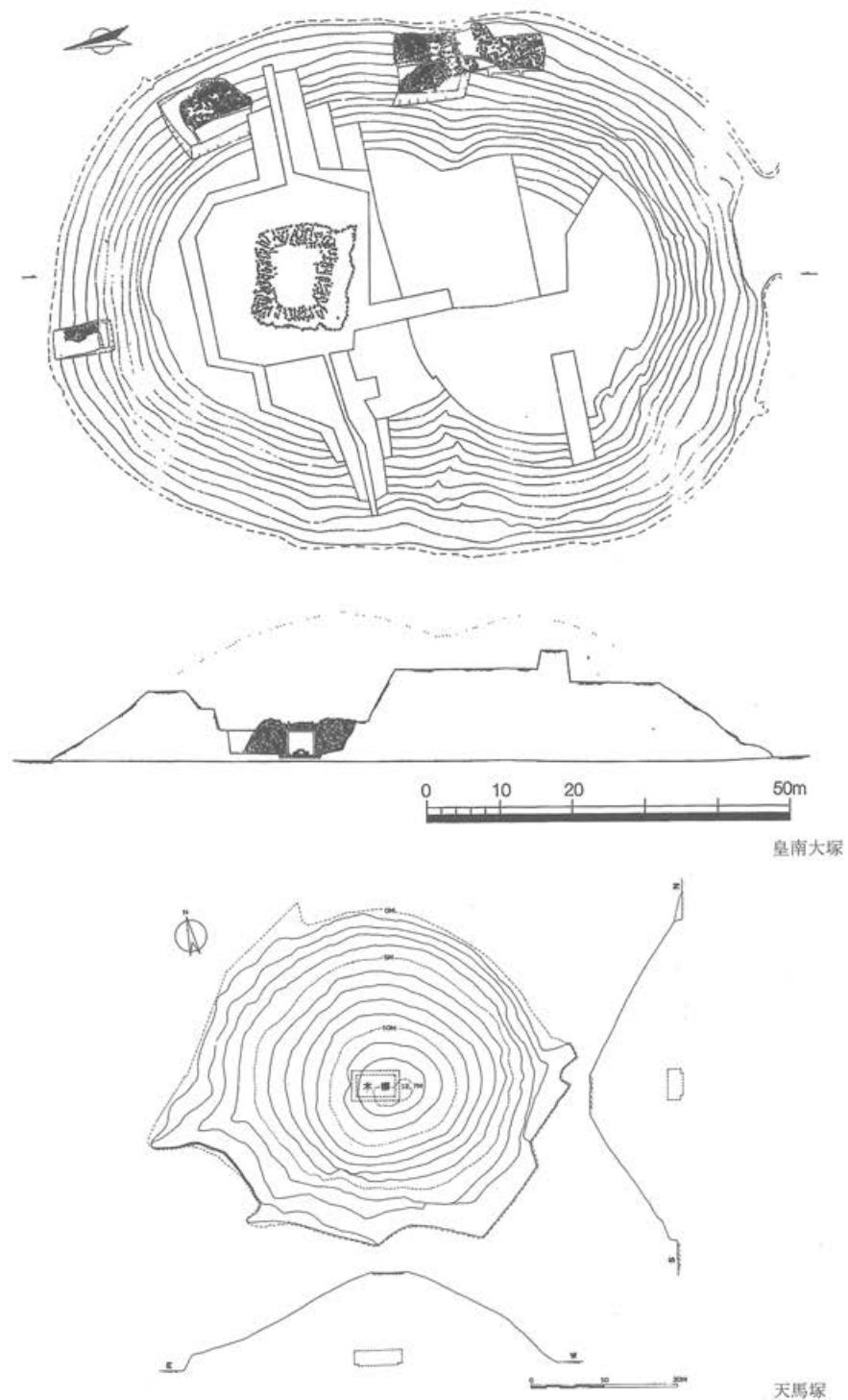
天馬塚（皇南洞155号墳） 天馬塚⁹は、慶州市皇南洞262番地に所在する積石木槨墓（第1図下）。皇南大塚と同じく皇南洞古墳群に属する。天馬塚の東側には皇南大塚（第98号墳）が隣接し、南東には味鄒王陵も所在する。1973年、皇南大塚に先だって全面発掘調査が実施され、出土した多量の金属製品や陶質土器から6世紀前半に築造された王陵と推定され、近年では智證麻立干（在位500–514年）の墓とする説が強い。墳丘は、規模からみると皇南大塚よりは小型だが、近在する金冠塚とほぼ同規模の円墳である。報告書では墳丘径47mとだけ記されているが、これは東西方向の径であり、南北方向は断面図を計測すると、約44mであるので、若干ではあるが楕円形を呈する。以上を整理すると、墳丘は長径47m、短径44m、墳丘高12.7mの楕円形を呈する（楕円指数94、長高指数27）。

皇吾洞54号墳（甲塚） 本古墳は、慶州市皇吾洞364–14番地、現在調査が続くチョクセム遺跡B地区内に所在する積石木槨墓である（第2図右）。1934年に朝鮮古蹟研究会の有光教一により発掘調査が実施された¹⁰。詳細な築造年代はあきらかではないが、5世紀代とみてよいだろう。古墳は甲塚と乙塚の2基からなるが、次に取りあげる皇吾洞16号墳とは異なり、護石で相互を連接することはない。甲塚の墳丘は、長径約20m、短径約16m、墳丘高5mの楕円形である（楕円指数80、長高指数25）。

皇吾洞第16号墳 本古墳は、慶州市皇吾洞375–4番地に所在し、1932・33年に朝鮮古蹟研究会の有光教一により発掘調査が実施され、近年発掘調査報告書が刊行された¹¹。調査の結果、12基からなる積石木槨墓であり、詳細はA～E墳丘の5つの墳丘からなり、さらにA墳丘とD墳丘の護石南部どうしをつなぐ護石の存在があきらかとなった（第2図左）。墳丘全体の規模は、東西約35m、南北約30m、墳丘残存高約3m（楕円指数86、長高指数8.5以上）である。各墳丘は、接し合うため墳丘長径・短径は正確に割り出せないが、A墳丘は東西約17.7m、B墳丘は東西約18m、C墳丘は東西約15.4m、D墳丘は東西21m以上、E墳丘は東西10.2mをはかるので、それぞれの墳丘単位でみた長高指数は、14.2～29.4とおおむね20を中心とした数値に分布する。護石の切り合い関係などから、D墳丘→B墳丘→C墳丘→A墳丘の順に構築され、E墳丘はA墳丘とのみ切り合い関係を有し、A墳丘に先行する。E墳丘脇の瓦棺も含めると、本古墳は都合8回分の埋葬の集合体といえる。出土遺物からみて埋葬がおこなわれた時期は、5世紀後半～6世紀前半という長期におよぶ。

竪穴系埋葬施設の墳丘の特徴 以上の例における楕円指数は、総じて90前後の値を示すようだが、80代となる楕円形とすべき例も多い。ただし、楕円指数が100に近い例、すなわち正円形を示す例は認められず、竪穴系埋葬施設を有する大型古墳の墳丘は、総じて楕円形あるいは楕円形に近い形状である。

先に触れた皇吾洞第16号墳の護石をみると、「本墳壠の外周を画して総括的な護石を繞ら



第1図 新羅における竪穴系埋葬施設を有する古墳（1） 1:1000

「そうとした形跡」¹²があり、最終的に墳丘をひとつに囲ってまとめる意識がはたらいていたようである。個別の埋葬に関しては円墳を指向するものの、埋葬が終わると隣接する古墳を包括する造作がおこなわれるので、包括した結果が不整形でもよかったのだろう。となると、墳丘の整美さよりも埋葬行為を繰り返した集合を重視したことが、慶州における積石木槨墓をはじめとした堅穴系埋葬施設を有する墳丘の特徴といえる。

なお、長高指数については後述するが、おおむね20以上の腰高な墳丘を指向するといった傾向がうかがえる。さらに慶州地域では、こうした腰高な墳丘がすくなくとも5世紀後半には築造されていた¹³。

(2) 新羅周辺地域における堅穴系埋葬施設を有する古墳の概観

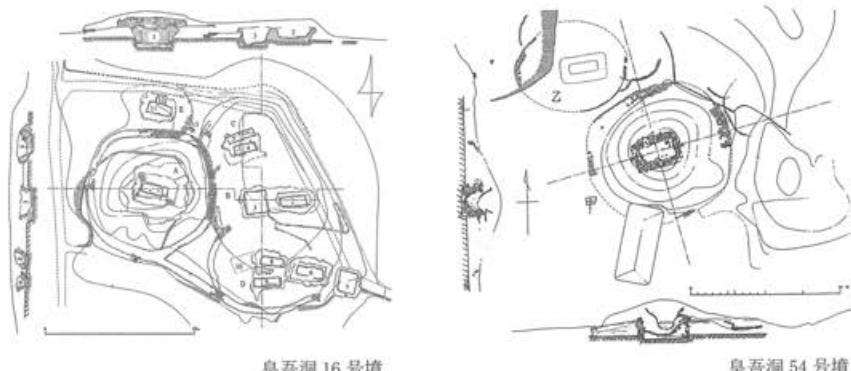
つづいて、新羅周辺地域における堅穴系埋葬施設を有する古墳では、新羅との共通点や相違点がみいだせるのか、以下に代表的な発掘調査例を概観する。ちなみに本来であれば、星山洞古墳群（星山伽耶）、校洞古墳群（非火伽倻）、道項里古墳群（阿羅加耶）など加耶諸地域の類例まで含めて検討するのが望ましいが、紙幅の関係上、池山洞古墳群を中心とした検討にとどめざるをえず、今回検討できなかった点については、再論を期したい。

池山洞第73号墳 池山洞古墳群は、慶尚北道高靈郡高靈邑にある主山の西南方向の稜線と、そこから派生する枝尾根上に立地する大加耶の主要古墳群である。このうち73号墳は、大型の墳丘を有する木槨墓で、埋葬施設は地表下に掘り込まれた墓壙内に設置されたいわゆる地下式である¹⁴（第3図左）。築造年代は、後述の75号墳も含めて5世紀前半頃と推定される。墳丘は、長径23m、短径22m、復元高約7mの弱楕円形である（楕円指数95.6、墳丘高指数29）。

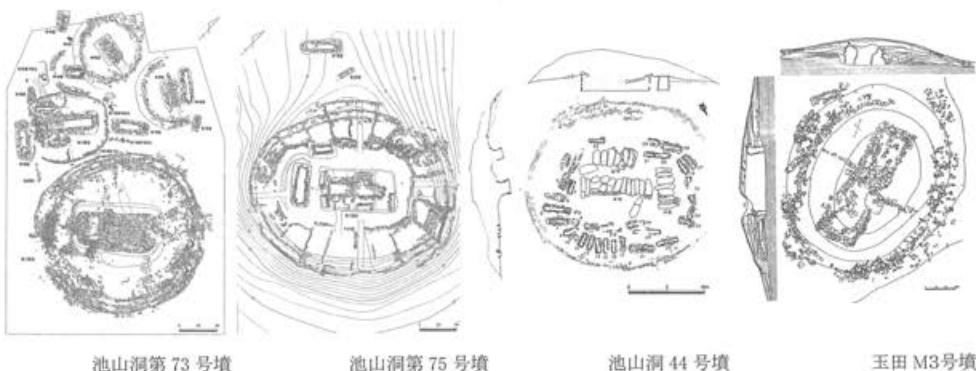
池山洞第75号墳 舌状台地末端部の微高隆起部にかかる傾斜地に立地する堅穴式石室および副葬槨や多数の殉葬槨を有する古墳である¹⁵（第3図中央左）。堅穴式石室はいわゆる地下式で、護石の外側にさらに周縁部を形成する事例である。墳丘は、長径27.3m、短径23.5m、復元高約8mの楕円形である（楕円指数86、墳丘高指数30）。

池山洞44号墳 主山の西南麓の稜線の緩傾斜面に立地する大型の古墳で、池山洞古墳群を代表する王墓とされる¹⁶。1977・78年に発掘調査された。最近刊行された報告書によれば、いわゆる地下式の主槨・南槨・西槨を取り巻くように32基の殉葬槨が設けられた5世紀末に築造された大伽耶王陵と推定されている（第3図中央右）。墳丘は、長径27m、短径25m、現存高3.6mのやや正円に近い楕円形である（楕円指数92、墳丘高指数13）。本来の墳高はさらに高かったと推定されるため、復元した場合の墳丘高指数は、もう少し高い数値を示すだろう。

玉田M3号墳 本古墳は、慶尚南道陜川郡双冊面城山里玉田の丘陵稜線上に所在する、多羅国王陵と推定される大規模な堅穴式石槨を有する古墳である¹⁷（第3図右）。馬具をはじ



第2図 新羅における豎穴系埋葬施設を有する古墳（2） 1:1000



第3図 新羅周辺における豎穴系埋葬施設を有する古墳 1:1000

めとした出土遺物は、日本との関連性が高い資料と以前から注目されてきたが、大伽耶と多羅國との密接な関係がうかがえる事例としても著名である。既往の研究によれば、玉田古墳群の3段階（5世紀後半以降）の首長墓とされ、報告書によれば5世紀末頃の築造と推定されている。墳丘は、南北（長径）21.6m、東西（短径）19.4m、残存高2.5mの楕円形である（楕円指数89、墳丘高指数12）。

楕円形になる理由 以上の例は、楕円指数が80代後半～90代前半と、楕円形ないしは楕円形に近い形状を示す例で占められ、このことから慶州における例と同様の傾向を示す。つまり、新羅およびその周辺地域における豎穴系埋葬施設を有する王陵クラスの古墳では、墳丘は正円形を指向する意識は希薄と考えられる。では、墳丘が楕円形ないしはそれに近い形状となった理由はなにか。

第2・3図をうかがうかぎり、豎穴系埋葬施設を有する古墳は、長径の方向がすべて埋葬施設の主軸方向に長い。ということは、埋葬施設の形状を反映した結果、墳丘が楕円形あるいはそれに類する形態になったと考えるのが妥当だろう。すなわち、豎穴系埋葬施設の形状に沿って墳丘を構築するのが、新羅や加耶などの地域における特徴といえる。つま

り当該時期の墳丘は、埋葬施設の形状と不可分の関係にあり、形状を整美に構築する要素よりも埋葬施設を被覆し、かつ腰高にする点を重視した。さらにいえば、積石木槨墓や堅穴式石槨墓などの墳丘は、埋葬施設を被覆する構造物として、埋葬施設に対して従属的位置づけだったことも示唆する。

腰高な墳丘となだらかな墳丘 後述する長高指数については、ここで縷説することを避けるが、5世紀前半から腰高な墳丘を築造していた池山洞古墳群、対して比較的なだらかな墳丘である玉田M3号墳と、墳丘高には地域差が存在するようだ。もちろん、墳丘の残存度合に応じて長高指数は本稿で示した値を前後するだろうが、極端な数値の変化は考えにくく、長高指数からみた地域性が存在した可能性が高い。ということは、加耶では墳丘の高さを強調する地域と、それほど強調しなかった地域とに分かれる公算が強い。加えて、時期的には墳丘築造が顕在化する5世紀前半から腰高な墳丘を築造し、それが継続することも明記せねばならない。つまり加耶では、慶州地域に先んじて腰高な墳丘を築造していた可能性も否定できない。双方の地域では、腰高な墳丘を築造する契機が異なっていた可能性も視野に入れておく必要があろう。

つづいて、新羅で横穴式石室が採用された以降の古墳の概要について述べる。

3. 新羅および周辺地域の横穴系埋葬施設と墳丘

(1) 慶州の横穴式石室墳概観

慶州地域では、普門里夫婦塚や皇南里151号墳などを嚆矢として、横穴式石室墳が出現する。その時期は6世紀初頭頃と推定され、こうした初期の石室平面形は長方形で羨道をもたない、韓国でいう横口式石室である。その後、6世紀中頃になると積石木槨墓から横口式石室へ漸移的に変化し、6世紀後半になると横穴式石室が姿をみせるようになる。

石室平面形が方形へと変化し、石室の位置は韓国でいう地上式が採用されるようになる。新羅における横穴式石室の受容、および定型化した石室構造と埋葬儀礼が備わるのは6～7世紀であり、日本列島における畿内系横穴式石室の拡散と前方後円墳の消滅とほぼ対応する。これは新羅に限らず、加耶や百濟でもほぼ同時期に中心的勢力が横穴式石室を受容し、高句麗以外の韓半島各地と日本列島の様相が類似する点は重要である。被葬者は、死屍台と呼ばれるベッド状の施設の上に安置されるが、横穴式石室導入初期には棺を使用した¹⁸。はじめは単葬だったものの、追葬もふくめた複数葬が主流となっていました点も新羅における横穴式石室墳の特徴である。

以下では、まず慶州における横穴式石室墳から取りあげる。なお、慶州では多数の横穴式石室墳が発掘調査されており、発掘調査報告書も刊行されているが、墳丘形状を正確に把握するという本稿の目的上、精緻な墳丘測量図が作成されている近年の調査成果を中心

に検討をすすめる。

隍城洞石室墳1987 慶州市隍城洞524-1番地、後述する隍城洞石室墳の170m南に所在する円墳である¹⁹（第4図左上）。同じく後述する龍江洞石室墳も本古墳の南東約1.5mに所在し、周囲は横穴式石室墳が数多く分布する地域となっている。石室は、ほぼ正方形の平面形を有する。墳丘内出土陶質土器からすると、7世紀後半以降の築造と考えられる。墳丘は径14.1m、墳丘高1m以上の正円形を呈する（楕円指数100、長高指数7以上）。

隍城洞石室墳2005 慶州市隍城洞906-5番地に所在する円墳。慶州市街地の北方の平坦地に所在する円墳である²⁰（第4図中央上）。石室は平面長方形の片袖式石室であり、石室内出土遺物からみて初葬は7世紀中葉頃、以降9世紀前半まで追葬がおこなわれていたようだ。護石の周囲からは陶質土器などが出土し、墳丘周囲で葬送儀礼をおこなっていたと推定できる。墳丘は、長径10.0m、短径9.8m、墳丘高1m以上、正円形に近い平面形態となる（楕円指数98、長高指数10以上）。

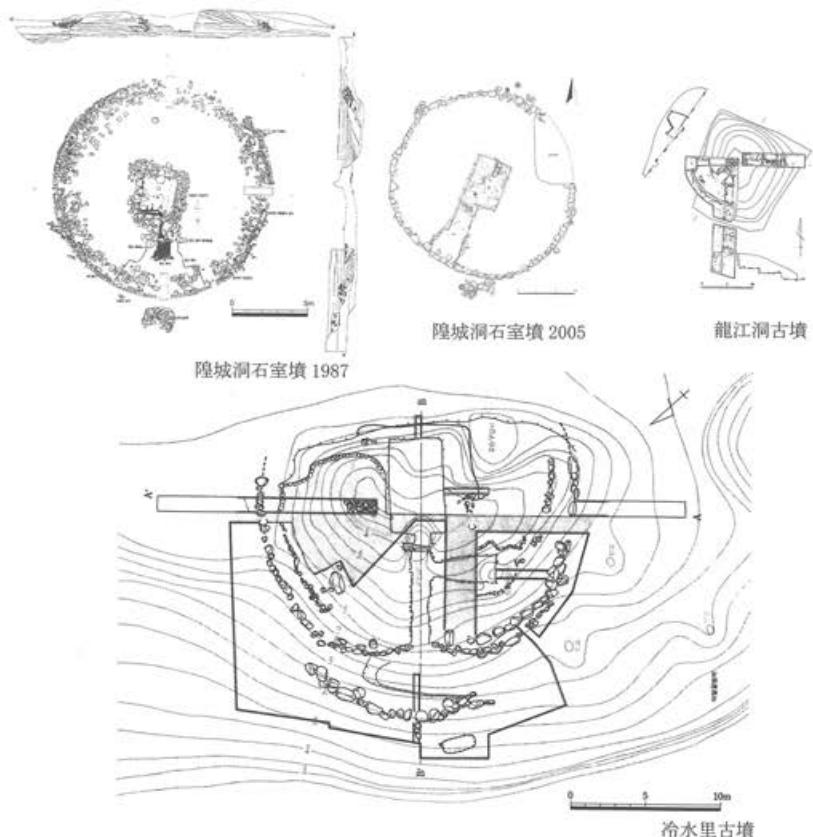
龍江洞古墳 慶州市龍江洞に所在し、石室内出土陶質土器からみると7世紀末～8世紀初頭の築造と推定される円墳である（第4図右）。1985・86年に発掘調査が実施され、平面正方形の横穴式石室東南隅および西南隅から人物土俑28体、土馬4体、土器15点、青銅製十二支神像7体が出土した²¹。墳丘は、東西13.5m、南北14.0mのほぼ正円形をなし、墳丘高3m（楕円指数96、長高指数21）。なお、墳丘下段の外護石は、最下段のみ残存するが、花崗岩の切石を使用し、あたかも建物基壇の地覆石のように据えられている。報告書でも指摘されているが、基壇外装の影響をうけた護石の一例として明記しておく。

冷水里古墳 6世紀前半の築造とされる本古墳は、慶尚北道迎日郡に所在し、新羅の横穴式石室墳としてはごく初期に属する円墳である²²（第4図下）。石室は大型で、墓壙のように地山を掘り込んでから石室を構築する、いわゆる半地下式の事例であり、その後大多数を占めるいわゆる地上式とは石室の位置があきらかに異なる。墳丘も曹永鉉が説くタマネギ式盛土方式が採用され、在地工人の手によらない古墳と推測され、高句麗の横穴式石室墳と構築技法が類似することが指摘されている²³。墳丘東側が削平されているため東西径は不明だが、護石の状況からするとほぼ正円形とみて問題ないだろう。墳丘は南北径21.0m、墳丘高現状5m、復元高6m（楕円指数不明、長高指数29）。

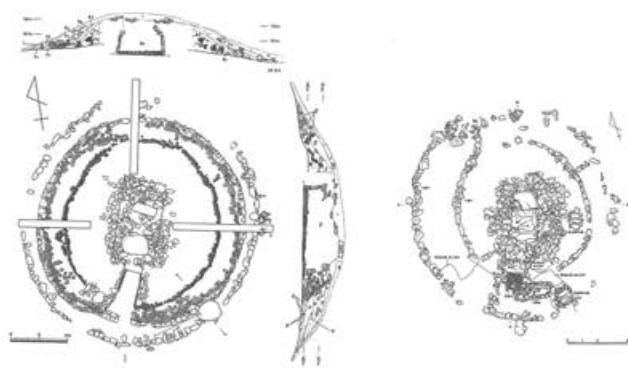
墳丘測量図との兼ね合いもあって、ここではわずか4例に絞って事例を取りあげたにすぎない。しかし、慶州における横穴式石室墳の調査事例は、上記の事例以外に代表的なものだけでも東川洞瓦塚、忠孝洞古墳群、路西洞の双床塚（路西洞137号墳）、馬塚（路西洞133号墳）、西岳洞古墳や西岳洞石枕塚など多数にのぼることを付け加えておく。

（2）新羅周辺地域における横穴式石室概観

次に、新羅周辺地域における横穴式石室墳のうち、近年発掘調査がおこなわれ、詳細な



第4図 新羅における横穴式石室を有する古墳 1:500



第5図 新羅周辺における横穴式石室を有する古墳 1:500

知見がえられた2例についてふれておく。

鶴尾里古墳1号墳 本古墳は、慶尚北道義城郡金城面鶴尾里山、海拔高162.6mの暮知山山頂に所在する。1995年・96年に慶北大学校博物館によって発掘調査が実施され、1号墳～

3号墳の3基の古墳を確認した²⁴（第5図左）。このうち本稿で検討対象とする1号墳（報告書では1号と記載）は、地上式の横穴式石室墳であり、3基中で最大の墳丘規模を有する。

横穴式石室は平面長方形の両袖式であり、玄室内に3基の屍床が確認されている。出土陶質土器からみて、初葬は6世紀前半と推定される。墳丘は、東西（短径）15.5m、南北（長径）16.5m、墳丘残存高3.2mと、わずかに橢円形を呈する（橢円指数94、長高指数19以上）。

亀山洞古墳 本古墳は、慶尚南道金海市大成洞、益城山の南側へのびる舌状地の稜線上に所在し、報告書によれば6世紀末頃の築造と推定される²⁵（第5図右）。埋葬施設は、主石室と呼ばれる墳丘中心に構築された片袖式の横穴式石室以外にも、2基の副葬石槨や石槨幕がみつかっている。墳丘は、東西14.2m、南北14.1m、墳丘現存高約2mとほぼ正円形を呈する（橢円指数99、長高指数14以上）。

（3）新羅および周辺地域における横穴式石室墳の評価

横穴式石室墳の墳丘と石室の特徴 以上、取りあげた事例は少ないが、慶州およびその周辺地域における横穴式石室墳は、いずれも橢円指数が100に近い値を示し、正円ないしは正円に近い整美な円墳であることが判明した。したがって、堅穴系埋葬施設を有する古墳よりもあきらかに正円に近い。慶州から離れた地域の横穴式石室墳では、鶴尾里1号墳のように橢円形となる事例もあるが、それでも堅穴系埋葬施設の墳丘と比べると、橢円指数が80代になる例はなく、数値的にも正円形を指向したことが明白である。慶州から離れた地域でも、亀山洞古墳のようにはほぼ正円形の事例もあり、ひろく正円形を目指してしたこととはほぼ間違いないといえる。長高指数をみると、数は少ないものの数値がもとめられた事例は、いずれも20～30代を示すため、堅穴系埋葬施設を有する古墳と数値的には大差ない。なお、長高指数については堅穴系埋葬施設と同様、20を超える例が認められ、引き続き腰高な墳丘が築造されていることがわかる。

さて、これら墳丘内における横穴式石室の平面位置をみると、各例とも玄室中央部付近に中心点がおさまるように設計されている。第4・5図に示したとおり、隣城洞石室墳の2基、龍江洞古墳、さらに鶴尾里1号墳、亀山洞古墳のいずれも横穴式石室の玄室中央部付近に墳丘の中心点が位置する。墳丘が一部損壊していたが、冷水里古墳もおそらく石室中心付近に墳丘中心がおさまるとみられる。その面一性をみると、横穴式石室墳は遺骸を墳丘の中心に据える、冒頭で述べた中央部埋葬を透徹するために計画されたことが確実である。こうした被葬者を埋葬施設と墳丘の中心に据える意識が、横穴式石室の本格的導入にともなって、古墳と埋葬施設のレイアウトを厳格におこない、意識されるようになったことは確かであろう。こうした埋葬観念に関する思想的・社会的・政治的な背景については、現状で確たる言説を持ち合わせておらず、今後の検討課題としたい。

墳丘正円形を指向する横穴式石室墳 新羅において横穴式石室墳の墳丘規模は、概して小

さい。本稿で取りあげた事例は、径10~15m前後のものばかりで、慶州などの大型積石木榔墓がおおむね25m以上、場合によっては50mも超える墳丘も存在することに比べるとその差異は歴然としている。この墳丘が小規模であるという点を重視すると、墳丘が小規模な分、墳丘の正確な割り付けが可能になったとも推測できる。ところが、堅穴系埋葬施設を有する墳丘でも、今回取りあげた皇吾洞54号墳のように、墳丘が20mを切る事例のほうが圧倒的に数が多い。ところが、こうした比較的小規模な例でも墳丘が正円形になることは稀だ。となると、墳丘が小規模になったという理由だけで正円形へ変容したとは考えにくく、それ以外の理由も考える必要がある。

さて、今回取りあげた横穴式石室墳は、いずれも単独の墳丘で完結する。ところが、時期がさかのぼった慶州の積石木榔墓をはじめとした堅穴系埋葬施設を有する古墳は、複数の埋葬施設とそれに対応する墳丘があり、相互が連接する例が多い（連接墳）。その結果、最終的には複数の墳丘が集合した、いわば墳丘の複合体となる。こうした構造的な特徴は、高さと墳丘長の比率には一定程度配慮されていたものの、墳丘を正円形とする意識はさほど強くなかったことに起因するとみられる。いっぽう横穴式石室墳は、単独の墳丘で完結することから、連接墳を必要としない構造面での変化が、墳丘の正円化を加速させたと考えておく。

側面が重視される墳丘 ところが、墳丘正円化をとげた理由はこれにとどまらなさそうである。横穴式石室における墳丘の正円化には、設計以外にも複数の理由があると筆者は推測したが、ここではその理由のひとつとして墳丘外表施設の様相に着目したい。

横穴式石室墳は、基本的に羨道が取り付く。いっぽう、韓国における横口式石室の例は無羨道であり、これらは百濟を中心に分布する。無羨道の理由は、いうまでもなく横口式の構造からみてあきらかなとおり、百濟では单葬を指向するという、新羅とは異なる墓制だったことに起因する。さて慶州地域では、統一新羅時代の築造と推定される獐山土偶塚



第6図 新羅の横穴式石室墳の例
(左: 獐山土偶塚石室開口部、右: 九政洞方形墳)

(墳丘径19m、墳丘高7m、長高指数36.8、第6図左)や九政洞方形墳(8世紀後半~9世紀前半、墳丘東西8.9m、南北8.8m、第6図右)など、羨道が墳丘端部まで取り付くことによって石室開口部が明瞭な例が多数存在する。これらはいずれも整美な円墳ないしは方墳である。新羅の場合、横穴式石室を導入したことによって単一の埋葬施設内に追葬が可能になった点が、墳丘正円化の誘因と考えたい。

無論、理由はそれだけではない。横穴式石室の導入は、換言すれば古墳の正面を決定することにもなる²⁶。朝鮮半島の横穴式石室墳をみると、百濟では7世紀を前後する時期に单葬化が進むが、新羅では追葬が続く。そのため、新羅では石室の出入口が必須となる。出入口の存在は、出入口の方向が古墳の正面となることにはかならない。日本列島では、横穴式石室がひろく列島内に定着して以降、横穴式石室へいたるまでの墓道や前庭部において、いわゆる墓前祭祀がおこなわれる事例が頻出する。横穴式石室の場合、正面側で何らかの儀礼や祭祀にともなうスペースが設けられた。先に取りあげた隙城洞石室墳2005では、墳丘周囲で葬送儀礼がおこなわれた痕跡を確認した。これは埋葬行為が墳丘築造完了後におこなわれたことを示唆するが、こうした墳丘周囲での儀礼が、慶州をはじめとした新羅の横穴式石室を有する古墳でひろくおこなわれたと考えると、埋葬や埋葬後にともなう儀礼や祭祀も、堅穴系埋葬施設を用いた時期とは場所やタイミングを含めて変化した可能性が高い。

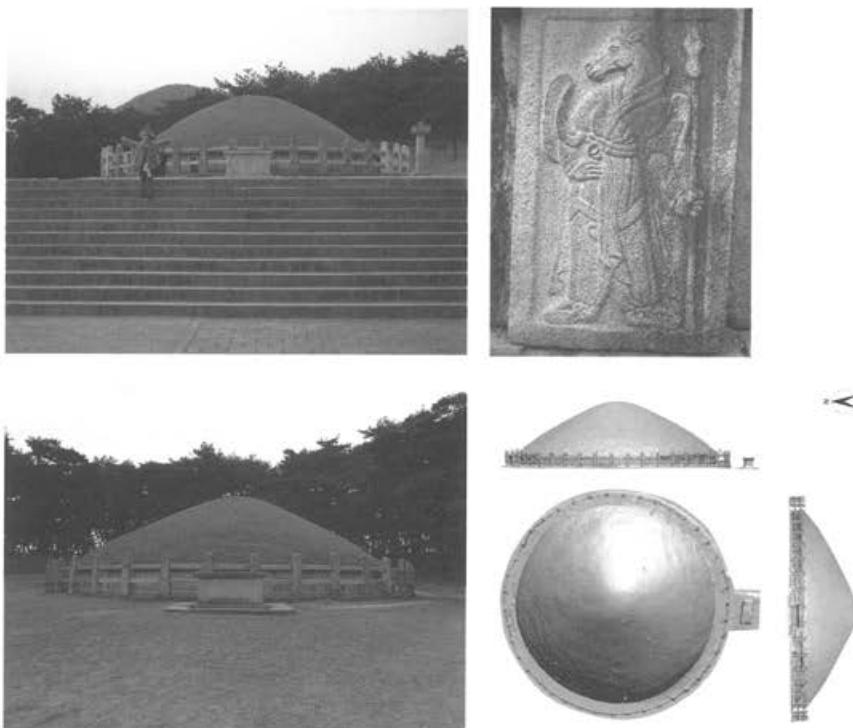
つまり、横穴式石室化にともなう埋葬順序の変化は、埋葬儀礼上の変化をひき起こし、さらには墳丘のありようをも変えたのではなかろうか。さらに、墳丘完成後の古墳周囲で儀礼がとりおこなわれたことは、いきおい直面する墳丘外表を重視し、従来以上に整備するのが自然な流れである。となると新羅では、横穴式石室墳の導入により墳丘の側面観を重視すること、加えて先述した墳丘構造の変化も相まって墳丘が正円化したと理解したい。
十二支像と墳丘 上述のとおり、横穴式石室の導入によって墳丘の側面観が重視されるようになったと解した。それに呼応するように、統一新羅の王陵では、墳裾に十二支像などの石造レリーフを配するようになる。十二支像は、堅穴系埋葬施設を有する墳丘の段階では認められない。中国で5世紀後半以降に流行する墓誌は、6世紀になると誌石と蓋石とがセットとして定型化し、それらに文様が彫り刻まれる。そこへ四神像が出現し、その後6世紀末~7世紀初頭になると十二支像が認められるようになる。さらに、擬人化された獸首人身の十二支像が盛行するのは唐中期(8世紀前半)であり、それと時期を同じくして統一新羅で創意を加えた十二支像が墳丘端部に基壇外装のごとく配され、以後盛んに用いられる²⁷。

元来、新羅の古墳は、地形的環境も影響するのだろうか、石を多用することを特徴とし、先述したとおり堅穴系埋葬施設の頃から護石によって墳裾の土留めがおこなわれ、その構

築は墳丘構築と一体であった²⁸。また、護石だけでなく埋葬施設本体や墳丘構築時に構築単位としてブロックで区画する場合にもやはり石列が用いられ、これらは墳丘完成時には埋没してみえなくなってしまう。このように墳丘構築、あるいはその後の封土流出防止としての護石や石列がめぐる事例は数多いが、これにレリーフなどを埋め込むことはない。となると護石の機能は、封土の流出防止が主であり、視覚的に訴求する効果はあまり期待されていなかったようだ。

墳丘に十二支像を配するようになる8世紀は、埋葬施設からいうと横穴式石室の導入後になる。こうした墳丘表飾を正確に割り付けて表示し、かつ像の性格上、方位を正確に表示することが要請され、その結果、墳丘形態は厳然と正円形あるいは正方形を指向するにいたったことは想像に難くない。また、先述した墳丘の側面観が重視されるようになった点も、十二支像などの表飾を導入する背景にあったのだろう。

実際に、慶州の金庚信墓（7世紀後半築造、9世紀に改修か、第7図上）、聖徳王陵（8世紀前半）、掛陵（伝元聖王陵、8世紀末、第7図下）などは、墳丘裾部に十二支像を配した例として著名である。ここでは、一例として掛陵の三次元墳丘測量図を図示するが、一見しただけでも平面形がいずれも正円形となるのがあきらかであり、墳丘正円化の傾向が



第7図 新羅における正円化した墳丘
(上：金庚信墓、下：掛陵)

強く認められる（第7図右下）。となると、十二支像をはじめとした墳丘表飾の淵源は、斎藤忠が説くように護石列にもとめるのならば、墳丘正円化は十二支像を配する以前、すなわち横穴式石室の導入を契機としたととらえるのが妥当だろう²⁹。

ちなみに、十二支像の表飾が存在する古墳の発掘調査例は限られているが、先述の九政洞方形墳以外に伝閔哀王陵（815年以前築造）や憲康王陵などがあり、このうち憲康王陵の埋葬施設は、横穴式石室と判明している³⁰。よって、十二支像の表飾がみられる古墳は、いずれも横穴式石室墳である可能性が高く、墳丘正円化が横穴式石室と密接にかかわるとした先の推定を補強する。

新羅寺院における基壇装飾 さて、こうした石造の表飾は古墳にとどまらない。月城郡外東面毛火洞の遠願寺址では、東西石塔の基壇に僧服をまとった十二支像が各面3体ずつ認められる。慶州以外でも慶尚北道醴泉郡廃開心寺五重石塔、全羅南道求靈郡華嚴寺五重石塔などに認められる³¹。寺院でも金堂基壇や須弥壇に十二支像が用いられる例がある。

また、寺院基壇外装にも図像を配した壇が用いられる例がある。その代表例として四天王寺址をとりあげる。四天王寺は、文武王19年（679）に完成した統一新羅の護国寺院であり、遺跡は慶州市街地から東へ5kmあまりの低丘陵上に所在する。双塔式伽藍配置を有する寺院として著名で、国立慶州文化財研究所による発掘調査が継続して実施されている。調査では、諸堂塔の詳細な構造が判明し、金堂両脇に取りつく翼廊の検出や、良好に残存する東西両木塔址の四天王像壇を配した基壇外装、掘込地業をふくめた基壇造成技術をはじめとして数多くの知見が得られている³²。良好に残されていた西木塔址および東木塔址の基壇は、地覆石上に隅柱と束柱を設置し、その間に長方形壇を3段以上積み重ね、各面中央に取りつく階段脇に、良志作と推定される縁軸四天王像壇を配する。四天王寺址の基壇表飾の白眉は、十二支像ではなく寺名にもみえる四天王像だが、新羅において図像を各方面に配する風習は、すでに7世紀代にはじまっていたことがうかがえる。こうした佛教寺院における基壇装飾なども、古墳の表飾を導入する背景にあったとみてよいだろう。先述した龍江洞古墳のように7世紀後半～末以降、護石は建物基壇の影響をうけた可能性が高く、こうした背景も念頭に置いておく必要がある。図像による構造物の表飾という行為は、寺院や古墳など土木構築物に相次いで採用され、統一新羅時代に根付いた文化なのだろう。

4. 墳丘の高大化とその評価

（1）墳丘の高大化とは

吉備南部における前方後円墳後円部の高さならびに角度を検討した宇垣匡雅によれば、古墳時代前期以降、墳丘高は漸減していく傾向にあるが、突如として前方後円墳集成編年³³（以下、集成編年と略称）7期から増大に転じ、集成編年8期にそのピークをむかえる。傾

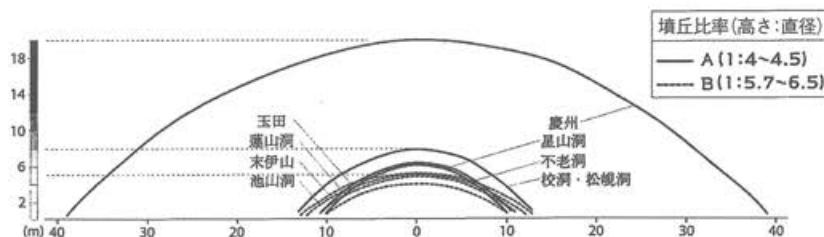
斜角は中期後半まで 27° 前後に収斂されているが、墳丘高の増大にともなって 40° 前後の急傾斜へと変化するという³⁴。さらに宇垣は、墳丘高の増大に際して、墳丘構築法の変化も背景にあると考え、葺石を斜面全面に構築することが困難なほど硬質な盛土になった点も理由のひとつとする³⁵。そのうえで宇垣は、集成編年7期における墳丘の一連の変化を大きな変革と評価し、墳丘長を重視する従来の価値観が転換し、墳丘高を重視するように変化した可能性を示唆する。理由については後述するが、筆者も大王墓クラスをのぞく大型古墳の墳丘が、列島の広い範囲で集成編年9・10期に急傾斜化することを指摘しており³⁶、宇垣の見解を首肯する立場をとる。加えて最近では、これを古墳の変遷のなかにおける墳丘の高大化（これまで腰高な墳丘と呼称してきたが、以下高大化とする）という一大画期と評価している³⁷。以下、その画期の評価について説明する。

(2) 新羅・加耶地域における墳丘の長さと高さ

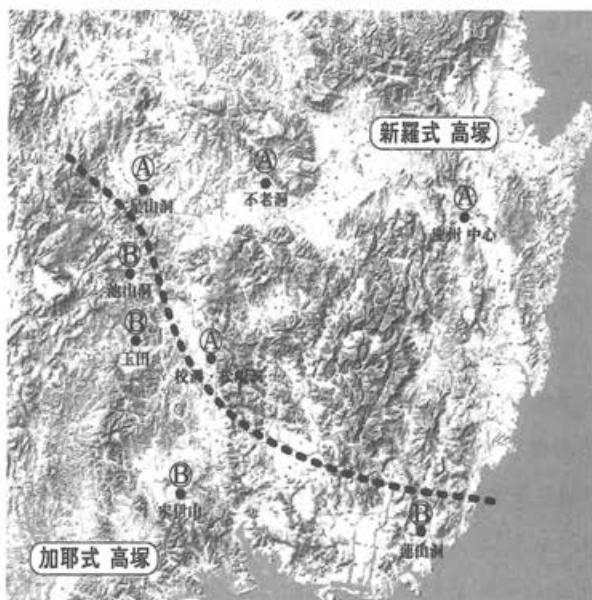
ここですこし視野を広げ、朝鮮半島の古墳では、墳丘と埋葬施設とがいかなる様相を示すのか検討してみよう。検討の対象は、新羅および加耶地域の代表的な大型墳（各古墳群の最大規模の古墳数基）である。当該地域の様相を検討した沈炫暭は、長さを高さで割った数値によって検討をおこなったが³⁸、先述のとおり筆者は高さを長さで割り、100を乗ずることにしている。既述したが、これを長高指数とよび、高さの割合がより明瞭に表現できると考えたためである。最大規模の古墳が古墳群中何基存在し、その規模についてまとめた沈の研究成果によると、それぞれの長高指数は次のとおりである。

慶州地域（中心古墳群、80m級4基）	25
大邱地域（不老洞古墳群、30m級3～4基）	24.8
星州地域（星山洞古墳群、30m級3～4基）	24.3
昌寧地域（校洞・松峴洞古墳群、30m級2～3基）	24.1
高靈地域（池山洞古墳群、最大規模は47号墳の約40m）	15.2
陝川地域（玉田古墳群、最大規模25m程度）	17.2
咸安地域（末伊山古墳群、30m級2～3基）	16.8
釜山地域（蓮山洞古墳群、25m級3基程度）	16.4

沈が説くように、長高指数が24前後の慶州の積石木槨墓と近似値を示す一群と、池山洞古墳群をはじめとする16前後の値を示す一群とに二分され、沈は前者を新羅式高塚、後者を加耶式高塚と分類する³⁹（第9図）。すなわち墳丘高は、墳丘長に対して一定の比率で設計されていたことを示唆すると同時に、地域によってその比率が異なっていたとみなしうる。後述するとおり長高指数が20を超える例は、高大化した墳丘として把握するため、沈のいう新羅式高塚は、いわば高大化した墳丘に該当する。また、沈が墳丘外形と規模の違いを示した図によると、墳丘の高さは、4m前後・6m前後・20m程度といいくつかの値に



第8図 新羅と加耶地域における墳丘規模



第9図 新羅式高塚および加耶式高塚の分布

まとまる（第8図）。他方、長さについては、慶州の例を除いて20~30m程度におさまり、高さが池山洞より3m以上も高い星山洞古墳群や不老洞古墳群では、墳丘長になると逆に数m小さくなっている。このように、高さでは明瞭な違いが抽出できるいっぽう、平面規模については明確な違いがみいだせない。となると新羅・加耶地域における古墳築造では、墳丘長よりもむしろ高さが重要な指標となっていた可能性が高い。すなわち古墳の階層性を可視化するため、高さを重視したのが新羅や加耶などの諸地域といえよう。

これら古墳の築造時期については、一部を先に述べたところだが、加耶地域で高大化した墳丘が5世紀前半から出現し、新羅の王陵はやや遅れて高大化するようだ。ただし加耶や新羅における一連の高大化は、日本列島における墳丘高大化に先んじていることもまた確かだろう。

(3) 北朝における墳丘

皇帝陵クラスの墳丘 朝鮮半島の古墳、とくに新羅式高塚が高大化しているとなれば、新

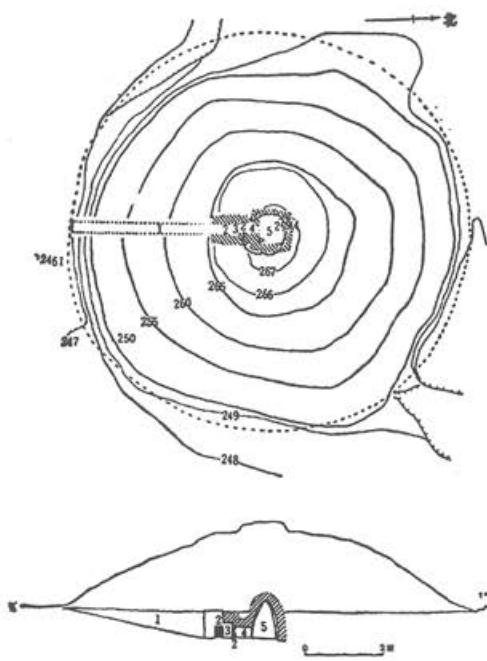
羅が遣使していた先である北朝など、同時期における中国の例も比較検討の対象に加える必要がある。

華北における4～5世紀の皇帝陵を概観すると、西晋（265～316）では墳丘をもたず、北魏（386～534）において高大な墳丘（円墳）を築造するようになる⁴⁰。いわば巨大墳丘をもつ墳墓の伝統に回帰したのである。その端緒となったとされる文明皇后（文成帝皇后）方山永固陵は、太和5（481）に築造が開始され、同8年（484）に完成した。墳丘は高さ28.87m、南北117m、東西124mで、長高指数は南北で割った場合24.7となる。宣武帝（51年没）景陵は、直径105～110m、高さ25m、長高指数は22.7～23.8となる（第10図）。この2基の墳墓は、いずれも長高指数24～25程度で、かつ一見して高大な墳丘であり、先述した高大な円丘を有する新羅式高塚と視覚的なイメージも近似する。以上の例を勘案し、高大化した墳丘とは、長高指数が20を超えるものと定義しておく。

皇帝陵クラス以外の墳丘 次に、皇帝陵クラス以外の墳墓の様相も瞥見しておこう⁴¹。

6世紀の例となるが、封龍墓（523年埋葬）は、一辺40m、高さ6mで長高指数は15となる。しかし、これ以外の大型墳は非常に墳丘が高くなる例が多い。墳丘の残存度合によって数値は多少変動するだろうが、例えば京兆王墓（498年）では周長約128m、高さ20mとされるので、長高指数は98と極端に高い。これは極端な例としても、6世紀以降の例では長高指数が50超となるものが多い。墳丘規模はさして大きくなく、墳丘の残存状態も上々とはいえないものの、そこからでも尖塔のごとく高くしようという指向性を感じるのは筆者だけだろうか。高位の人間は、とくに墳丘高を用いて権力の所在を顕在化させる意識がはたらいていた可能性が十分にあるだろう。

以上のことから、北魏でも墳丘築造に際してその格式を表現するには、高さが大きな要素となっていたことが確実とみられる。すなわち、北朝から新羅・加耶といった東アジアの複数地域において、高さこそ墳丘における階層表示に重要な指標と考えてよいだろう。すくなくとも北朝で、こうした高大な墳丘をそなえた墳墓が再度出現する端緒が、北魏方山永固陵であることは注意できる。5世紀後半、高大な墳丘をそなえた墳墓造営が華北で



第10図 北魏景陵

復活し、その後も広大な墳丘築造が続いたという一連の動向は、看過するわけにはいかない。それは北魏すなわち鮮卑が、中国文化を5世紀代に受容しつつ、その後半で大きく進展をみせたことと決して無関係でなく⁴²、その影響は中国の動向を注視する周辺諸地域にもおよんだとみるのが妥当だろう。5世紀後半以降、墳丘高大化が顕著となる新羅が、まさにその代表例である。

ただし、新羅がはじめて北魏へ遣使するのは、6世紀初頭までまたねばならない。したがって、北魏と新羅との直接的な外交関係によって新羅で墳丘高大化が示現したとは考えにくい。となると、新羅の北に位置する高句麗と新羅との関係を念頭においておく必要があろう。高句麗は、4世紀代より北朝との朝貢関係を重視しており、当然北魏の動向についても敏感だったはずである⁴³。また新羅は、4世紀以降5世紀代、研究によっては6世紀初頭頃⁴⁴まで高句麗の強い影響下にあったことはよく知られている。つまり、新羅は高句麗を経由して間接的に墳丘の高大化について情報を入手した、もしくは墳丘高大化の影響をうけたであろう高句麗の直接的な影響をもって墳丘高大化を指向した可能性が高い。

(4) 蓮山洞古墳群の出現

蓮山洞古墳群 釜山広域市蓮堤区蓮山洞古墳群は、釜山地域で唯一墳丘を有する古墳群として知られ、近年、整備にむけた発掘調査が実施された⁴⁵（第11図）。これまでに墳丘を有するものは18基にのぼり、それらは3つの群から構成され、このうち中央に位置する第2群が中心的な存在とされる。墳丘を有する古墳は、5世紀後半～6世紀初頭頃にかけて築造されたと推定されている。無論、日本との編年調律に課題を抱える現状のなかで、この年代観を日本の古墳へ直結させることには躊躇を禁じ得ないが、年代的な前後を加味しても5世紀末における日本での墳丘高大化と、蓮山洞古墳群で突如として出現した墳丘との間にまったく何の機縁もなかったとは考えにくい。というのも、それまで無墳丘だった地域の有力者墓に突如として墳丘を導入するには、相応の理由が存在したとみるほかないからである。

蓮山洞古墳群出現の背景 5世紀後半、大伽耶が勢力を増し、加耶の周囲では百濟と新羅



第11図 蓮山洞古墳群

が強大化していった時期である。その北には、以前ほどの強盛を誇ってはいないものの、なお勢力を維持していた高句麗も存在していた。それぞれの版図拡大や失地回復をめざした武力衝突が繰り返され、統一新羅の成立にいたるまでまさに激動の時期を迎えたつあるこの時期、権力を示現する手段をいかなるものとするか、これは大変重要な要素として為政者が熟慮を重ねた点にちがいない。そのひとつとして、権力の所在を視覚的かつ効果的に訴求する手段として、墳丘を導入するといった事象へと結びついたのだろう。

そして、墳丘を導入した典型例こそ、蓮山洞古墳群だった。かたや從来から墳丘を築造してきた日本列島では、東アジア的ないしは中国的ともいえる墳丘を高大化させる点にならうことで、権力の階層性を可視的に表現したとみなしうる。したがって、墳丘高大化と無墳丘の地域に墳丘が出現する点とは、一見無関係にみえるようでいて、実際は同じ文脈の中に位置づけられる可能性を指摘したい。

5. 日韓墳丘の比較検討

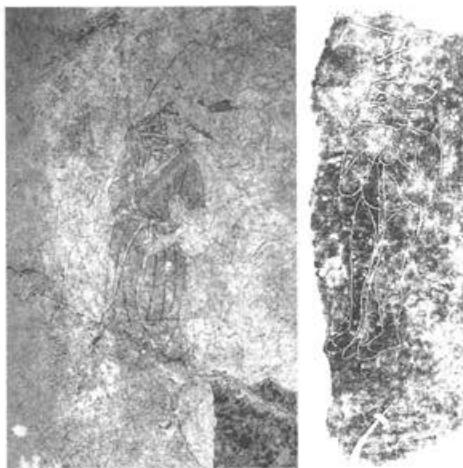
(1) 新羅における墳丘構造の変化と日本への影響

新羅における墳丘形態の変化 新羅では、横穴式石室の導入を契機として墳丘が正円化することを指摘した。その理由として、横穴式石室は追葬が可能であることから、連接墳など墳丘を追加して埋葬施設を構築する必要がなくなった点、そして墳丘外表に設置した墓壇外装状の表飾を導入した点などがあげられると考えた。

では、日本に新羅における墳丘変化の影響は直接的にあったかというと、なかなか明確にいえそうにない。日本列島と新羅との関係性が指摘できる点は、次の十二支像および墳丘高大化についてであろう。

日本と中国における十二支像 ここでは、日本の古墳における十二支像の類例について触れておく。十二支像の最も著名な事例は、奈良県高市郡明日香村キトラ古墳石室（横口式石槨）内に描かれた十二支像であろう（第12図左）。十二支像は、四神像とともに石室壁体を構成する東西南北の4面に描かれ、これまでに北壁で子・丑・亥、東壁で寅、南壁で午、西壁で戌の計6体分が発見されている⁴⁶。单葬の石室内にある壁画のため、埋葬後は不可視状態となり、統一新羅の王陵などにみられる表飾的な要素ではなく、龍江洞古墳のような青銅製の像というかたちもとらない。したがってキトラ古墳の事例は、新羅とは墓制的な位置づけが大きく異なる。

奈良市那富山墓は、奈良山丘陵の東端に所在し、聖武天皇皇太子の陵墓としていることから、最近まで詳細はあきらかでなかった。ただ、ここには隼人石と呼ばれる両輝石安山岩に裸体の獣頭人身の線刻が存在し（第12図右）、古くから注意されてきた⁴⁷。その後、宮内庁の陵内石造物の緊急保存処理にともない、奈良県立橿原考古学研究所も参画した調査



第12図 日本における十二支像の例
(左:キトラ古墳石室寅像、右:那富山墓第1石)

が1998年に実施され、「図録 石の文化 古代大和の石造物」として公にされている⁴⁸。それによると、それぞれ子頭人身、戌頭人身、卯頭人身、丑頭人身の4石からなるが、いずれも原位置を保っていない。隼人石が当初据え置かれた場所は詳らかではないが、元来は墳墓の腰石として12石が新羅墳墓のように配されていたと河上邦彦は推定する⁴⁹。それが正しいとすると、新羅の影響を直接的にうけた例として那富山墓を評価することができる。ただし、日本において新羅との親近性がうかがえる石造十二支像は、ほぼ那富山墓に限られることとなり、その影響は限定的だったようだ。

中国の十二支像は、十二支像出現以前の5世紀後半から墓誌が盛行する北朝において出現する。時期は6世紀末、墓誌石の装飾として現れる。墓誌石の周辺に十二支像が示される事例は、中国以外だと契丹のみである。他方、新羅と高句麗の陵墓における十二支像は、すでにみたように墳丘表飾として示現するため、朝鮮半島と中国との間ではその表現手法において大きく相違する⁵⁰。となると、そもそも中国では十二支像を墳丘表面で見せるという意味あいは全くといってよいほどなかったことになる。姜友邦や西嶋定生が説くとおり、新羅における十二支像の類例は、新羅独特のものと推測される。先にも考察したが、これは至近で十二支像をみせるという機能を重視した所産であり、図像を整美に配置するには、正確な方位の設定および整然とした割り付けが不可欠である。そこで墳丘も整った形態を指向するようになったのだろう。さらに寺院基壇などで図像による表飾が用いられ、こうした点とも連関して新羅古墳の墳丘は、図像を配するという墓制の導入によって正円化をとげたと理解したい。

(2) 墳丘高大化の影響とその評価

墳丘高大化の時代 墳丘の高大化は、まず華北（北魏）において鮮卑の漢化が進み、巨大な墳丘が復活したことを発端とし、こうした動向が周辺地域へと影響をおよぼしたことによると推察される。その代表として高句麗からの間接的な影響によって成立すると推定した新羅の例を先にあげたが、海を越えた倭も例外ではなかったようだ。新羅に遅れて墳丘高大化の風潮は、日本列島にもおよぶ。日本列島における墳丘高大化は、どの地域からの影響なのか微証をみいだすことが困難だが、倭と北朝との関係の希薄性を斟酌すると、やはり朝鮮半島を経由したと考えるのが妥当であり、新羅とおなじ間接的な影響の下で成立

したとみるのが無難だろう。

朝鮮半島南西部を中心に前方後円墳が分布することは以前より知られていたが、これら前方後円墳が崇山江流域に出現する時期が5世紀後半とされる⁵¹。5世紀後半という時代は、東アジア規模で俯瞰すると、ある種のグローバル化を指向せざるをえない時代性だった可能性が高く、墓制からみるとそれまでの伝統的な要素を残しつつも、中国的な方法に則り王権の威勢を顯示した時代と換言できるかもしれない。

6世紀の日本列島における墳丘高大化 墳丘高大化は、なにも5世紀後半～末にかぎった現象ではない。日本列島では6世紀中頃～後半にかけても福岡市元岡石ヶ原古墳（6世紀中頃、長高指数20）、長崎県壱岐市対馬塚古墳（6世紀後半、同21.4～25.7）、双六古墳（6世紀後半、同23.2）、熊本県大野窟古墳（6世紀後半～末、同22.5）など、腰高の後円部と低平な前方部を有する前方後円墳、あるいは奈良県高取町与樂鑑子塚古墳（6世紀後半、同32）をはじめとした墳丘傾斜角が急で腰高な墳丘となる円墳などが散見される。近年、こうした特徴に加えて細長い前方部を有する点などを「見瀬丸山型前方後円墳」とよび、欽明朝に外交関係で活躍した有力者との歴史的評価が与えられている⁵²。朝鮮半島や大陸との接点を有する有力者が、かの地で趨勢となっていた高大化した墳丘についての情報を得やすい環境にあったと推察できる。

版築の採用と墳丘高大化 その後、近畿地方における終末期古墳の一部では、墳丘に城壁や基壇構築のための技術である版築が採用され、類例はいずれも墳丘が高大である。それは飛鳥地域に集中することを特徴とし、牽牛子塚古墳⁵³（対辺長約22m、墳丘高4.5m以上、長高指数20.5）、高松塚古墳⁵⁴（墳丘直径約23m、南側墳丘高5.8m、長高指数25.2）、キトラ古墳⁵⁵（墳丘直径13.8m、墳丘高4.1m以上、長高指数29.7）、中尾山古墳⁵⁶（墳丘長約19m、残存墳丘高約4m、長高指数21.1）などが代表例で、いずれも長高指数20超の高大化した墳丘の範疇に含まれる。なお、発掘調査は実施されていないが、檜隈大内陵（天武・持統天皇合葬陵）も墳丘対辺長約37m、墳丘高約7.7m、長高指数20.8と、同じく高大化した墳丘となる⁵⁷。このうち、牽牛子塚古墳は齊明天皇陵、中尾山古墳は文武天皇陵との説が最有力であり、筆者もこの説をとる。墳丘規模からみて、高松塚古墳は天皇陵に次ぐクラス、キトラ古墳はさらにその下位に位置づけられる。こうした複数の階層の古墳には版築が採用されるが、まずこれら古墳が築造された7世紀後半～8世紀初頭頃は、古墳築造自体がきわめて限定期だ。類例が飛鳥地域に限定的、かつ天皇陵クラスにいたるまで採用される技術が版築である。つまり版築という土木技術は、本格的な仏教寺院の造営開始以降、王権中枢部を代表する技術のひとつとして政権中枢で管理されていた可能性が高い⁵⁸。高大化した墳丘を構築するうえで、垂直に立つ基壇を構築する版築は、まさにうってつけの土木技術だったはずだ。当時の政権は、高大化した墳丘築造に適した版築を寺院造営技術か

ら転用し、墳丘構築技術に組み入れたのだろう。

以上の点からみて、腰高な墳丘が古墳の築造終焉まで命脈を保っていることに注意しておく。つまり日本列島では、高大化した古墳が一時的な現象で終わらず、一定の時間幅をもって築造し、被葬者側は、高大化をたんなる流行として片付けるのではなく、当時の東アジアの情勢にかんがみて意図的に採用した可能性を考えた。

その文脈で理解するならば、古墳という「見せびらかし」の装置⁵⁹が変質し、東アジアの墳墓において、規模よりも高さ、平面規模の巨大さと同列あるいはそれ以上に重視されていた墳丘の高さという基準が日本列島に持ち込まれ、墳丘長を超えるほどの階層性を表示する要素となった可能性があろう。すなわち日本列島の古墳が、長さを強調するモニュメントから、高さを強調するモニュメントへと転換していく時期が5世紀後半～末として、歴史的に当該時期を評価できると考える。いわば、列島固有の価値観をもった墳丘から東アジア世界の価値観をそなえた墳丘へと大きく舵を切った、それこそ日本の古墳が中期後半～末にかけて転換期をむかえ、後期古墳の時代へと移行する。横穴式石室の普及についても、こうした観点も加味して検討すべきと考える。

6. 跋

本稿では、新羅および周辺地域における古墳の墳丘の形状を分析した結果、橢円から正円へという墳丘形態の変化を把握した。

まず、堅穴系埋葬施設を有する墳丘が、総じて橢円形ないしはそれに近い墳丘形態を呈する理由として、埋葬施設形状に沿って被覆することを第一義とした墳丘だったためと考えた。つまりこの時期の墳丘は、埋葬施設に対して従属的と考えた。

次に、墳丘が正円化する契機として、横穴式石室という従来になかった新來の墓制の採用がまずあげられる。さらに、横穴式石室の採用が墳丘周囲の整備を誘引し、そのため墳丘外表に基壇外装状の表飾をおこない、そこへ十二支像をはじめとしたレリーフを設置する、その設置には方位や正確な割り付けが不可欠なため、結果として整美な円丘を構築するようになる。以上の2点が墳丘正円化の契機ととらえた。

そして、墳丘の表飾に十二支像を採用するという点では、少数ではあるものの日本にも類例が存在し、新羅との直接的な影響をうかがうことができた。ただし、その影響は限定的だったと推察される。

また新羅では、北魏にて墳丘を有する皇帝陵の築造が再開されたことを契機に、高句麗を経由するいわば間接的な影響をうけて、すくなくとも5世紀後半から新羅式高塚として高大な墳丘を築造するようになり、埋葬施設構造が転換する6世紀以降も持続する。つまり、高大化した墳丘を築造する必要性が不变だった地域が新羅や加耶などであった。対す

る日本列島の古墳は、従来の墳丘長を重視する指向性から、墳丘高を重視して高大化させる指向性へと転換した。その時期は5世紀末頃とみられ、日本列島では、はじめて高さを重視して高大化した墳丘へと舵を切り、地域性を超えて新羅など東アジアに共通するようになったと理解したい。一見無関係な日本列島と新羅との古墳には、東アジア規模でみると、墳丘の高大化といふいわば墳墓の中国化という共通項を抽出することが可能である。そしてその歴史的な背景については、中国的な墳墓造営によって権力の所在をより顕在化させるという共通した目的があったのではなかろうか。

それぞれ中国を筆頭とした周辺地域の動向を注視し、結果として共通する指向性を具備するようになった古墳の墳丘、墳丘は広域で政治的動向を映しだす存在として、今後も詳細な属性分析をすすめていく重要性を強調しておく。さらに、政治的側面の考察にとどまらず、墳墓と社会とのかかわりについても検討をすすめ、より多角的な視点から墳丘をとらえることを目指したい。

註

- 1 青木 敬「韓國の古墳における墳丘構築法－墳丘断面からみた検討－」『専修考古学』第11号、2005年、pp.39–64。
- 2 青木 敬 「前期古墳における墳頂部の性格と地域性－拡張する古墳、しない古墳－」『古墳文化』Ⅱ、國學院大學古墳時代研究会、2007年、pp.33–45。
- 3 青木 敬「前期古墳の埋葬儀礼－「墓」から「場」へ－」『専修考古学』第12号、2007年、pp.29–45。
- 4 青木 敬「古墳における墳丘と石室の相関性」『日本考古学』第23号、2007年、pp.41–65。
- 5 吉井秀夫「朝鮮三国時代における墓制の地域性と被葬者集団」『考古学研究』第49卷第3号、2002年、pp.37–51。
- 6 吉井秀夫「朝鮮三国時代における墓制の地域性と被葬者集団」(前掲註5)、p.44。
- 7 吉井秀夫「朝鮮三国時代における墓制の地域性と被葬者集団」(前掲註5)。
- 8 文化財管理局文化財研究所『皇南大塚(北墳)』1985年。文化財管理局文化財研究所『皇南大塚(南墳)』1994年。
- 9 文化財広報部文化財管理局『天馬塚』1974年。
- 10 有光教一「皇吾里第54號墳 甲乙二塚」『昭和8年度古蹟調査概報』朝鮮総督府、1934年。
- 11 有光教一・藤井和夫『朝鮮古蹟研究會遺稿 I』CEACS・(財) 東洋文庫、2000年。
- 12 有光教一・藤井和夫『朝鮮古蹟研究會遺稿 I』(前掲註10)、p.188。
- 13 その初現ならびに皇南大塚をはじめとした積石木椁墓の年代観については諸説あり、ここでいう腰高で大型化した墳丘がいつまでさかのぼるか定見をみないが、皇南大塚は白井克也による新羅土器編年における新羅II A期中(南墳)・新段階(北墳)との見解にしたがい、5世紀後半とした。白井克也「新羅土器の型式・分布変化と年代観－日韓古墳編年の並行関係と曆年代－」『朝鮮古代研究』第4号、2003年、pp.1–42。
- 14 高靈郡大伽耶博物館・大東文化財研究院『高靈池山洞第73~75号墳』2012年。
- 15 高靈郡大伽耶博物館・大東文化財研究院『高靈池山洞第73~75号墳』(前掲註14)。

- 16 慶北大学校博物館ほか『高靈池山洞44号墳－大伽耶王陵－』慶北大学校博物館学術叢書37・慶北大学校考古人類学科考古学叢書1、2009年。
- 17 慶尚大学校博物館『陜川玉田古墳群Ⅱ M 3号墳』慶尚大学校博物館調査報告第6輯、1990年。趙榮濟『玉田古墳群と多羅國』、海安、2007年。
- 18 曹永鉉（堀田啓一訳）「三国時代の横穴式石室墳」『季刊考古学』第45号、1993年、pp.21–27。曹永鉉（吉井秀夫訳）「新羅・加耶の横口・横穴式石室墓」『考古学ジャーナル』No.461、2000年、pp.23–29。
- 19 李康承・李熙濬『慶州隍城洞石室墳』国立慶州博物館・慶州市、1993年。
- 20 国立慶州文化財研究所・慶州市『慶州隍城洞石室墳906-5番地』学術研究叢書47、2005年。
- 21 文化財研究所・慶州古蹟発掘調査団『慶州龍江洞古墳発掘調査報告書』1990年。
- 22 国立慶州博物館『冷水里古墳』1995年。
- 23 曹永鉉（吉井秀夫訳）「新羅・加耶の横口・横穴式石室墓」（前掲註18）。
- 24 金東淑（土生田純之訳）「義城鶴尾里古墳発掘調査概報」『専修考古学』第7号、専修大学考古学会、1998年、pp.79–92。慶北大学校博物館ほか『鶴尾里古墳』慶北大学校博物館学術叢書28、2002年。
- 25 釜慶大学校博物館『金海龟山洞古墳』釜慶大学校博物館研究叢書第5輯、2000年。
- 26 小林行雄『日本考古学概説』東京創元社、1951年。
- 27 姜友邦『新羅の十二支像』韓国美術シリーズ8、近藤出版社、1983年。
- 28 沈炫暉「新羅積石木椁墓의構造와 築造過程」『韓国考古学報』88、2013年、pp.72–119。
- 29 斎藤忠「統一新羅の陵墓の考察－十二支像をもつ王陵を中心として－」『朝鮮学報』第119·120輯、1986年、pp.113–142。
- 30 国立慶州文化財研究所『憲康王陵補修收拾調査報告書』1995年。
- 31 大坂金太郎「十二支方位神を装飾彫刻した新羅時代の遺蹟と遺物」『朝鮮学報』第53輯、1969年、pp.43–50。
- 32 池炳穆・崔ヤンミ（高田貫太訳）「大韓民国慶州四天王寺址」『考古学研究』第55卷第2号、2008年、pp.109–110。
- 33 広瀬和雄「前方後円墳の畿内編年」『前方後円墳集成』中国・四国編、山川出版社、1991年、pp.24–26。
- 34 宇垣匡雅「古墳の墳丘高」『考古学研究』第57卷第2号、2010年、pp.80–91。
- 35 宇垣匡雅「古墳の墳丘高」（前掲註33）、p.88。
- 36 青木敬『古墳築造の研究－墳丘からみた古墳の地域性－』六一書房、2003年。
- 37 青木敬「日本古墳の墳丘築造技術とその系統」『蓮山洞古墳群의意義와 評価』釜山広域市蓮堤区・釜山大学校博物館、2013年、pp.29–59。
- 38 沈炫暉「新羅・加耶高塚古墳의築造技術－地域別高塚築造model의提示－」『蓮山洞古墳群의意義와 評価』釜山広域市蓮堤区・釜山大学校博物館、2013年、pp.135–164。
- 39 沈炫暉「新羅・加耶高塚古墳의築造技術－地域別高塚築造model의提示－」（前掲註37）、pp.150–154。
- 40 塩沢裕仁『千年帝都洛陽　その遺跡と人文・自然環境』雄山閣、2010年。
- 41 罗丰『从山陵为貴到不封不木寢－北朝墓葬封土的转变』『蓮山洞古墳群의意義와 評価』釜山広域市蓮堤区・釜山大学校博物館、2013年、pp.85–132。
- 42 向井祐介「北魏の考古資料と鮮卑の漢化」『東洋史研究』第68卷第3号、2009年、pp.516–528。
- 43 李成制（田中俊明監訳・篠原啓方訳）「中国南北朝との関係」「高句麗の政治と社会」明石書店、pp.189–204

- 44 糸永佳正「新羅の高句麗からの自立時期について」『歴史研究』第36巻、1999年、pp.249–268。
- 45 釜山市博物館・釜山広域市蓮堤区『蓮山洞古墳群－高塚古墳基礎調査－』釜山博物館学術研究叢書34、2012年。
- 46 文化庁・奈良文化財研究所・奈良県立橿原考古学研究所・明日香村教育委員会『特別史跡キトラ古墳発掘調査報告』2008年、pp.42–46。
- 47 柴田常惠「元明陵の隼人石に就て」『東京人類学会雑誌』第25巻第284号、1909年、pp.47–51。
- 48 北條朝彦「元明天皇陵内碑・那富山墓内「隼人石」・桧隈墓内「猿石」の保存処理及び調査報告」『書陵部紀要』第51号、2000年、pp.1–14。
- 49 河上邦彦「隼人石」『図録 石の文化 古代大和の石造物』橿原考古学研究所、2001年、pp.101–109。
- 50 西嶋定生「中国・朝鮮・日本における十二支像の変遷について」『古代東アジア史論集』下巻、吉川弘文館、1978年、pp.295–337。
- 51 朴天秀『加耶と倭 韓半島と日本列島の考古学』講談社選書メチエ398、2007年。
- 52 土生田純之「墳丘の特徴と評価」『馬越長火塚古墳群』農橋市埋蔵文化財調査報告書第120集、2012年、pp.329–341。
- 53 明日香村教育委員会『牽牛子塚古墳発掘調査報告書－飛鳥の刳り貫き式横口式石槨墳の調査－』明日香村文化財調査報告書第10集、2013年。
- 54 奈良文化財研究所『高松塚古墳の調査 国宝高松塚古墳壁画恒久保存対策検討のための平成16年度発掘調査報告』2006年。
- 55 若杉智宏「キトラ古墳の墳丘形状」『文化財論叢IV』奈良文化財研究所学報第92冊、2012年、pp.461–472。
- 56 明日香村教育委員会『牽牛子塚古墳発掘調査報告書－飛鳥の刳り貫き式横口式石槨墳の調査－』(前掲註53)。
- 57 明日香村教育委員会『牽牛子塚古墳発掘調査報告書－飛鳥の刳り貫き式横口式石槨墳の調査－』(前掲註53)、p.290。
- 58 青木 敬「掘込地業と版築からみた古代土木技術の展開」『文化財論叢IV』奈良文化財研究所学報第92冊、2012年、pp.961–990。
- 59 若狭徹『古墳時代ガイドブック』シリーズ「遺跡を学ぶ」別冊04、新泉社、2013年、p.88。

挿図出典

- 第1図 上：国立慶州文化財研究所・慶州市『新羅古墳基礎学術調査研究Ⅲ－文献・考古資料』2007年、p.338 図1。下：文化財広報部文化財管理局『天馬塚』(前掲註9)、図面2。
- 第2図 左：有光教一・藤井和夫『朝鮮古蹟研究會遺稿I』(前掲註10)、p.44 図版第2。右：国立慶州文化財研究所・慶州市『新羅古墳基礎学術調査研究Ⅲ－文献・考古資料』2007年、p.189 図1。
- 第3図 左：高靈郡大伽耶博物館・大東文化財研究院『高靈池山洞第73～75号墳』(前掲註14)、p.42 図面11。中央左：高靈郡大伽耶博物館・大東文化財研究院『高靈池山洞第73～75号墳』(前掲註14)、p.279 図面128。中央右：高靈郡『大伽耶古墳群発掘調査報告書』1979年、p.14 図4。右：慶尚大学校博物館『陜川玉田古墳群II M 3号墳』(前掲註17)、p.5 図面3。
- 第4図 左上：国立慶州文化財研究所・慶州市『新羅古墳基礎学術調査研究Ⅲ－文献・考古資料』2007年、p.454 図2。上中央：国立慶州文化財研究所・慶州市『慶州龍城洞石室墳906－5番地』(前掲註20)、pp.37–38 図面13。右上：文化財研究所・慶州古蹟発掘調査団『慶州龍江洞古墳発掘調査報告書』(前掲註21)、p.22 図面4。下：国立慶州博物館『冷水里古墳』(前掲註22)、

p.27 図 7。

- 第5図 左:慶北大学校博物館ほか『鶴尾里古墳』(前掲註24)、p.29 図面4。右:釜慶大学校博物館『金海龜山洞古墳』(前掲註25)、p.19 図面4。
- 第6図 左右とも筆者撮影。
- 第7図 上左・右とも筆者撮影。下左:筆者撮影。下右:国立慶州文化財研究所・慶州市『新羅古墳基礎学術調査研究IV - 石造物資料』2007年、p.599 掛陵平面 / 断面図。
- 第8図 沈炫澈「新羅・加耶 高塚古墳의 築造技術 - 地域別 高塚築造 model 의 提示 -」(前掲註38)、p.150 図面13の文字の一部を日本語に変更。
- 第9図 沈炫澈「新羅・加耶 高塚古墳의 築造技術 - 地域別 高塚築造 model 의 提示 -」(前掲註38)、p.151 図面14。
- 第10図 罗 卒「从山陵为贵到不封不木対 - 北朝墓葬封土的转变」(前掲註41)、p.93 図3。
- 第11図 釜山市博物館・釜山広域市蓮堤区『蓮山洞古墳群 - 高塚古墳基礎調査 -』(前掲註45)、p.17 図面2。
- 第12図 左:奈良文化財研究所撮影。右:河上邦彦「隼人石」『図録 石の文化 古代大和の石造物』(前掲註49)、p.102 隼人石の第一石拓本。

한일 왕릉급고분 분구의 특질과 평가

青木 敬 (아오키 다카시)

요지 본고에서는 신라 및 그 주변지역 고분의 분구를 분석하고, 일본열도 고분과 비교 검토를 실시한다. 분석 방법은 대상이 되는 사례의 분구 형상이 타원형 혹은 정원형(正圓形) 중 어느 쪽을 지향하는지 지수를 이용하여 수치를 산출한다. 또한 분구 길이에 대한 분구 높이의 비율을 나타내기 위해 여기에도 지수를 사용한다. 도출된 지수를 바탕으로 출현연대나 지역성 등을 파악한다.

분석 결과 대상지역에서는 분구가 타원에서 정원으로 변화하는 것을 파악하였고, 그것이 수혈계 매장시설에서 횡혈계 매장시설로 전환하는 시기와 횈을 같이함을 명확하게 알 수 있었다. 그 이유로는 수혈계 매장시설을 가진 고분에서는 매장시설의 형상을 따라 주위를 높이 편복하는 것이, 분구의 제일 첫 역할이었기 때문이라고 생각하였다. 그 후 횡혈계 석실의 채용이 분구 주위의 정비를 유인하여, 분구 외표에 기단외장상(基壇外裝狀)의 표식을 행하고, 거기에 십이지상을 위시한 부조물을 설치한다. 이러한 점이 분구 정원화의 계기라고 해석하였다.

또한 신라에서는 북魏(北魏)의 고대화 된 황제릉의 축조가 계기로, 적어도 5세기 후반부터 신라식 고총으로서의 고대화 된 분구를 축조하고, 횡혈계로 매장시설이 변화함에도 계속 이어진다. 거기에 분구의 고대화는 중국 북조에서 처음 시작된 것으로, 북조의 영향이 점차 신라에서 일본열도로 파급되어 있다고 생각하였다. 5세기 후반 이후 분구는 고대화라고 하는 소위 중국적인 분묘형태를 채용하였고, 동아시아의 동향을 살펴봤을 때, 권력의 소재를 명확화 한다는 점에서, 각지의 왕권에 공통된 지향성이 있었던 것으로 추론하였다.

주제어 : 분구, 정원화(正圓化), 고대화(高大化), 신라, 가야, 일본열도

Characteristics and Evaluations of the Mounds of Royal Tombs of Japan and Korea

Aoki Takashi

Abstract: This contribution analyzes the mounds of tombs in Silla and surrounding regions, and makes a comparative consideration with tombs of the Japanese archipelago. As an analytic device, to determine whether the mound form of a particular example should be regarded as an elliptic versus circular in shape, numeric values of an index were calculated. Further, another index was used to show the proportion of mound height to mound length. Based on the index values thus derived, factors such as the age of appearance and regionality of the tombs were ascertained.

As a result of this analysis, a change in mounds from ellipses to correct circles was grasped for the region in question, which clearly concurs in timing with the transition from vertical burial facilities to horizontal ones. As reason for this, it is considered that at tombs having vertical facilities, the primary role of the mound was for providing a high cover for the burial which followed its shape. Subsequently, the adoption of horizontal stone chambers induced preparation of the circumference of the mound, with decorative treatment of the mound's outer surface in the same manner as for the podium of a building, on which relief carvings including figures of the Oriental zodiac were set up. Since placement of the latter requires correct directional orientation and accurate sectioning of the circumference, beautifully proportioned round mounds were built. This aspect is interpreted as the impetus for the trend to mounds built in correct circular form.

Also, in Silla, with the renewed construction in Northern Wei of royal tombs trending towards monumental size, tombs achieving monumental size were built in the Silla high-mounded style from the latter half of the fifth century at latest, and this trend continued even after the change to horizontal type burial facilities. Further, this trend towards monumental tomb size, which had its roots in the Northern dynasties of China, is thought to have reached Japan as the influence of the Northern dynasties gradually spread to the archipelago via Silla. It is thus inferred that from the latter half of the fifth century, mounds achieved monumental size as the so-called Chinese type form of tomb mound was adopted, and based on this broad East Asian trend, there was a common orientation among monarchies in every quarter for making manifest the locus of authority.

Keywords: tomb mound, trend toward correct circular form, trend toward monumental size, Silla, Gaya, Japanese archipelago